



大 門 小 だ よ り

4月号

大門大好き いい仲間 進んで学ぼう 元気な子

平成30年4月5日
横浜市立大門小学校

春を待つ心 始まりの春

校長 佐藤 峰子

自宅から駅に向かう坂道の途中に、しだれ桜の木があります。枝が道路まで伸びてアーチ状になっており、春、しだれ桜のアーチをくぐると、何かよいことが起こるような、元気をもらえるような気がして、私は毎年開花を待ち望んでいました。ここ数年、しだれ桜は以前のような花の勢いがなく、立ち止まって見上げることも少なくなっていました。

寒暖の差が激しかった今年の春、しだれ桜は昨年より色鮮やかに、心なしか花の数も多く咲きました。新年度スタートとなった4月2日は快晴で、しだれ桜の花弁の濃いピンク色と青空のコントラストが見事でした。しだれ桜のアーチの下から空を見上げると、体の中から「さあやるぞ」という思いが湧き出て、よい一年にしようと思改めて思いました。桜の開花を、春を待つ心は、新しい出発を、出会いを待つ心でもあるように思います。

大門小学校にも、春を待ちわびていた可愛い1年生が、111名入学しました。新しい出会いは、新しい喜び、新しい楽しさ、新しい学び、新しい発見の始まりです。

始まりの春にぴったり合う言葉を、以前友人が教えてくれました。ある学校の校長先生が書かれた本に載っていた「草の芽の 早く出ずるも 遅きのも いずれ来る春 待つものなれば」という言葉です。本の題名を聞いたような気もするのですが記憶がなく、友人と話した内容だけを鮮明に覚えています。

草の芽を、「子どもの育ち」と置き換えて考えてみました。入学時の子ども一人ひとりの理解力や身辺処理などの自立、運動能力などは様々です。「そのとき」だけを見れば、「喜んだり」「がっかりしたり」「落ち込んだり」することがあるかもしれません。しかし、子どもが「そのとき」のままであるわけではありません。今花を咲かせている子もいるでしょうが、今殻をかぶっていて、将来芽を出し、花を咲かせるための準備をしている子もいるのです。すんなり芽が出てくるのか、ゆっくり芽が出てくるのか、どちらを向いて出てくるのかは、「待ち人」にかかってくるということを友人と話しました。あるときには我慢も、忍耐も必要です。じっと見守ったり、声をかけたり、励ましたり・・・子どもにあった支援をしていかなければなりません。それが大事な栄養となり、子ども自身の力となって芽を出し、花を咲かせるのです。

友人は、昨年学校職を退職しました。友人との話を思い出しながら、実は友人が私の「待ち人」となってくれていたのではないかと思に至りました。いつか花が咲くように、支え、導いてくれていたのかなと今は感謝の気持ちでいっぱいです。

子どもたちが、自分の力で花を咲かせられるように、今年度も職員一同力を合わせて支援してまいります。保護者や地域の皆様の、ご理解・ご協力をお願いいたします。